

過去の地震から知る、未来の備え ～海沿いで地震にあったときには

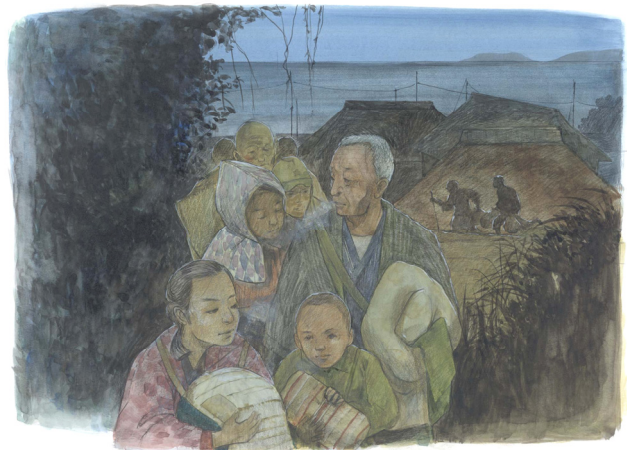
名古屋大学災害対策室 木村玲欧

未来の地震にそなえるためには、過去の地震を知ることが大切。1945年にこの地域で2,306人の死者を出した「三河地震」から、未来の備えにつながる教訓を考えていきます。

■水が沖に引くのを見たおばあさんたちが、「津波が来るで、高台に上がれ」と言った。その言葉でみんなが高台に急いで避難した。自分は考えもしなかったことで「年寄りの知恵」だと思った。
(西浦町稲生集落(蒲郡市西浦町稲生)・飯島孝子さん)

家の外にでると、水が「ぐわっ」とものすごい勢いで、沖のほうへ引いていった。そしたら集落のおばあちゃんたちがみんな「津波が来るで、ちょっとあの上に上がらにゃ」って言った。

わたしは津波の経験がなかったけど、周囲の家4～5軒みんな高台へ急いで避難した。もう無我夢中だった。これは年寄りの知恵だと思う。津波がくると津波の恐怖はわたしたちは分からへんけど、年寄りの言うこと聞いてみんな上に上がっちゃったからね。



絵 藤田哲也

2004年12月26日、スマトラ沖地震津波によって22万人の人が犠牲になりました。日本でも、1896年明治三陸津波では2万2千人、1933年昭和三陸津波では3千人が亡くなっています。最近では、2004年9月5日紀伊半島南東沖地震、そして2006年11月15日・2007年1月13日の千島列島東方の地震でも津波警報が出され、小さいながらも津波が観測されました。

大切なのは「地震＝津波連想」を持つことです。つまり、沿岸部にいて地震の揺れを感じたら、「即、津波の危険性を思い出して、高い場所(高台・高い鉄筋コンクリートビルの上階など)に避難する」ことを連想し、そして「最初の波が収まったあとも、第2波・第3波があるため、津波警報が解除されるまでは戻らない」ということです。ここでのポイントは、地震直後に「地震の詳しい情報を得ようとする」「警報を待たない」「どんなにあいまいな状況でも逃げる」ということに尽きます。

人間は、地震発生後に被害も警報も変わったようすもないと「正常性バイアス」が働きます。つまり「あまり大したことはないだろう」と思って行動をとらないのです。これは日常生活においては、刻々と変わる環境変化に人間が適応するための大切な心的機能なのですが、地震津波時に正常性バイアスが働くと、いのちを奪う仇ともなります。

1983年5月26日の日本海中部地震では、日本での死者104名のうち、100名が津波による死者でした。そしてその中には、釣り人17名、遠足中の小学生13名、湾岸工事関係者41名が含まれているのです。「津波は海岸の住民の問題で、自分たちにはどうでもいい！」と断言する人もいます。この人たちが海辺で釣りをしたり、海水浴をしたり、サーフィン、散策等をしていて地震津波が発生したときに果たしてどうなるのか。内陸部住民にとっても、決して他人事ではないのです。